



Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2018.11.01

「出遇」蓮如上人御影道中を通して

道因寺住職

相馬 豊

今ほどご紹介いただきました白山市相川町にあります道因寺の住職をしております相馬豊と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今年も浄光寺さんの報恩講ということで今日、明日と二日間に渡つてのご縁になるかと思えます。さきほど蓮如上人御影道中を交えてとご案内いただきましたが、そのことを踏まえながら改めてこの報恩講に私たちが出遇っていく。そのことを一緒に訪ねて行きたく思います。

皆さんご承知のように宗祖親鸞

聖人がお亡くなりになりましたのが1262年の11月28日。今年が2017年ですから引き算をいたしますと755。親鸞聖人の亡くなった年を入れますと756年。報恩講というお言葉が使われるようになってまいりましたのは親鸞聖人から数えて三代目、覚如上人。その覚如上人が1294年に『報恩講私記』というものを作られます。そこに初めて「報恩講」という文字が表されていいる。亡くなられた32年後です。それまでは親鸞聖人の亡くなった28日を中心とした御講が執り結

ばれていた。そこに有縁の方が相寄り集いて、「私は親鸞聖人からこのような言葉を聞くことが出来ました、あなたはどのような言葉を親鸞聖人からいただいておりますか」とその一つ一つの言葉を確かめながらもう一度親鸞聖人の遺徳を偲んでいく、そのことが28日講という御講で執り結ばれていました。そのことを中心として具体的にこの遺徳を多くの方々に知っていただくうちとの中で作られたのが報恩講。756年、これだけの歴史を持つているということ。このことは何を私たちに伝えてくださっているかといえは人の歴史です。

756年、現代に至るまでこの国も色んな変化を遂げてまいりました。また私たちの先輩である方々もその時代その時代の色んな価値観や秩序の中で変わってまいりました。今も時代や社会は大きく変わりつつあります。しかし、いくら時代や社会が、人間の価値観が変わったとしても自分の人生、人間としてのいのちの事実をもう一度聞いていこう、訪ねていこう、その道が実は人の歴史です。その歴史の中でただ道が伝わったわけではなくて、このことが本当に大切なのだということによって受け継ぎ伝えられた方々によって新たな人を生み出してきました。これが報恩講の歴史ではないでしょうか。新しく人を生み出してきた歴史です。その事実はまさに人生の事実、いのちの事実を尽くして生きていく、そこに中心が置かれています。報恩講は756年、蓮如上人御影道中は344回、そういう歴史を経てきているということです。

この御影道中というのは、蓮如上人の御影を京都の真宗本廟から吉崎別院まで運んで、吉崎別院にて御忌が勤まり、今度は吉崎別院から京都まで運んでいる、単にそういうことではないわけですね。これはあくまでも御仏事です。仏事としての御影道中。報恩講も御仏事です。つまりここに報恩講ということと蓮如上人御影道中ということは共通の確かめなければならぬ大切な事柄が込められているということです。344回の御影道中は人の歴史でもあります。その人の歴史とい

う中で改めて蓮如上人御影道中が御
仏事であると。その仏事の中心は何
かと言えばそれは蓮如上人の『御文』
の一帖目第八通に蓮如上人のお言葉
としてこう書かれおります。「この

く さ む す び

在所に居住せしむる根元はなにごと
ぞなれば、そもそも人界の生をうけ
て、あいがたき仏法にすでにあえる
身が、いたずらにむなく捺落にし
ずまは、まことにもつてあさまし
きことにはあらずや」と。そこに「人
界の生をうけて」とありますが、現
代の私たちも人間という身をいただ
いて生まれてまいりました。しかし、
いつの間にか私たちはそのことが当
たり前のように捉えるようになって
おります。蓮如上人御影道中、まさ
にそれは「人間に生まれてきたその
事実をあなたはどのようにいただい
ていますか」、こういう問いかけの道
中でもあるわけです。また言葉を言
い換えますと「今あなたは人間に生
まれてきたことを本当に喜んでおら
れますか」、こういう問いかけでも
あるのではないのでしょうか。このこ
とをもう一度私たち一人一人が自問
自答しなければならぬのではない

でしょうか。そのことがいつの間に
か当たり前のように思っている私た
ち。しかし人界の生を受けた、そし
て有難き仏法に遇える身だと、ここ
に大事な事が込められています。

そのことをですね、松任在住の現
在97歳の浅田正作さんという方がこ
ういう言葉で語りかけられておられ
ます。「みんなこわれた なんにもな
らなかつた だが私の先に その
ことを喜びとして 歩いてゆく人が
いた」と。「みんなこわれた、なんに
もならなかつた」、普通なら私たちは
ここで立ち止まります。自分が思い
描いたもの、あるいは思い通りにし
ようとした事柄が思い通りにならな
かつた。どんなに努力、精進をして
みても思い通りにならない。思い通
りにならないければ私たちはそこで苛
立ち、怒りというものを起こします。
でも浅田正作さんは長い間農業に従
事されながらお寺に足を運んで仏法
という教えを聞いてこられた。その
ことを通してこう言われます。「だが
私の先に そのことを喜びとして
歩いている人がいた」と。仏法に出
遇ってその仏法というものと自分の



「蓮如上人御影道中」平成29年4月23日 撮影：松島晋

思い描いたものとの違いのなかで絶
望し、改めて仏法を聞いたときの喜
びとしての言葉です。人というもの
に出遇ったということです。私たち
は毎日家庭生活の中で家族と出会
はしています。しかし、私たちの家
族との出会いや人との出会いとい
うのはどういう出会いでしょうか。挨
拶をしたり色んな会話をしますけれ
ども、本当に家族や友に出遇ってき
たのでしょうか。そうすると改めて
人に出遇うということは単に人に出
会うわけではなくてその方を生かす
言葉、その言葉の出遇いでもあると

いうことです。

私たちはそれぞれ自分の年齢を生
きています。この年齢はただ毎年誕
生日を経て積み重ねてきた年齢だけ
ではなくて、自分が生まれてきた時
から今日まで時代や社会の中で見て
きたこと聞いてきたこと、そのこと
を背負って今の私たちの年齢は成り
立っています。そこには色んな人と
の出遇い、そして言葉の出遇いとい
うものが私の背景にあるということ
です。まさにそれがこの報恩講を勤
めていく、蓮如上人御影道中の共通
するところだと思います。人が人を生み、そ
の人が亡くなったことを通してまた
その意思を受けてまた人が歩み出
ていく。その連続性の中で「このこと
が大事なんですよ」と言われた事は
まことやったということです。その
ことが確かだからこそ現代までそれ
を受け継ぎ、伝えてくださった人と
いう存在がある。

蓮如上人御影道中、私も今日まで
七回歩いておりますけれども、歩く
と色んな人との出遇いがあります。
本当に驚かされることばかりで
す。例えば今年の場合、私は吉崎か

ら京都まで歩きましたけれども、いつ蓮如上人の御影が通るかという時間は大体決まっております。そうすると例年のごとくこの時間にこの道を通っていくことを多くの方は知っておられます。だからその時間に合わせて蓮如上人の御影道中にお会いしたいという方が街角あるいは家の外で待つておられます。しかし遅れることがほとんどです。普通私たちは待つときはどうして待つでしょうか。こういうふうには椅子が置いてあれば座って待つ。椅子がなければ立ったまま待つている。しかし蓮如上人の御影道中では、本当に驚かされます。朝早い時間であってもまだ冷たいアスファルトの上に正座をされている。あるいは日中の熱くなつたアスファルトの上で正座をして待つている。一瞬ですよ、通っていくのは。ほんの一瞬通っていくだけなのに正座をして待ち続けておられる。ただ正座しているだけでなくて、きちんと合掌されて小さな声で「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と。これ驚きです。いつ来るか分からないその人を正座して待つている。それもアスファルトの上で。それはその人がその姿勢をとったということとは間違いないけれども、その人がそうすることを見つけてきた歴史でもあるわけです。単に自分がしているわけではなくてそのことを受け継いできた方々が、そういう姿を通してしてきたことを見てきた。そして、そのことを踏まえながら改めて自分も人生の中で色んな経験や体験をし、時には悩んで悔やんで涙を流す。その一つ一つの中で本当にこのこと一つが大切なことなんだと領いた時、はじめて私たちは合掌ができるのではないのでしょうか。

正座をして待つていてくれる、その姿を見たときですね、駆け寄つてですね、「どうか立って下さい」とこういう風に声をかけるんですけれどもお一人も立ち上がりません。「このままでもいいんです」と。なにかです、自分たちは蓮如上人の御影をお預かりし、京都までお供しておるけれども、人間の存在の大きさをその街道の人々が改めて教えてくれます。例えば国道沿いを通つていてもですね、「蓮如上人のお通り」という声を聞いた時、玄関から小走りですつてきたり、お庭で咲いた花を蓮如上人にあげてくださいと持つてくる。時代が変わり、社会が変わろうとしていてもそこに大切なことを受け継いできた方々。その姿に出遇つていく。その姿を見たときに改めて問われるのは私の姿勢です。日々の日常生活の中で私はどういう生活をしているのだろうか。人との出遇いの中で自問自答してみたり、もう一度振り返つてみる事ができる。

蓮如上人御影道中は4月16日から23日までが御下向、そして5月2日から9日までが御上洛というかたちでの道中が歩まれます。これが毎年行われておりますから、どういうふうにして受け止められているかという点、行事と受け止められます。毎年恒例の行事なんだと。確かに行事かもしれません。でも行事を行司るのは誰でしょうか。行事を行司っているのは人なんです。人がいないと行事は勤まらないんです。この報恩講もそうですよね。毎年決まった日時に報恩講が勤まつていく。報恩講という御仏事だけれども、そこに人がいなければ行事は成り立ちません。だから主人公は人なんです。私たち一人一人が主人公としてこの本堂に集つてきた。蓮如上人御影道中を歩かれた。人が中心なんです。その人が何を私たちに教えてくれるかというと、自分の苦しみや悩みを抱えながら絶望して思い通りにならないものを抱えながら生きていく。しかし、そこにそのことを喜びとして歩いてる人の姿に出遇うのです。だから感動なんです。驚きです。会つたこともない地域も違う人達が、このことが私にとつての生活の事実ですという姿を目の前で表してくれる。そこに驚きが起こるのです。その驚きは誰がつくるのかというと、それは人なんです。私が出遇つた一人一人が大らかなこととして受け継ぎ伝えられたことを目の前で証してくれる人です。その人との出遇いを通していつた時、改めて私たちが普段忘れていた大切なことをもう一回教えてくれる。それが蓮如上人の御文のお言葉でいう「人界の生をうけて」ということです。「今あなたは人間に生まれたことを本当に喜んでおられます

か、そのことを訪ねていこうとする時に蓮如上人が『御文』の四帖目四通の冒頭でご自分のことを踏まえながらこういう風に言われるんですね。「それ、秋もさり春もさりて、年月をおくること、昨日もすぎ今日もすぎ。いつのまにかは年老のつもるらんともおぼえず、しらざりき。」こういうお言葉が出てまいります。意識して申しますと、去年の秋も過ぎてしまい、今年の春も過ぎ去ってしまいました。季節が流れていくように時間という日も流れていきます。同時に年月も流れていきます。その間色んな人と出会い、語らいをし、色んなことを確かめていたはずなのに何一つ憶えておりません。まるで昨日という日も過ぎていったように今日も過ぎようとしています。今日もです。朝起きて時間が過ぎていきます。その間何をしてきたかといえほとんど憶えておりません。いつの間にか老いの白髪の身になっておりますと。私たちも毎日毎日それぞれ一生懸命生き続けていることには間違いはありません。そしてあれもしなければならぬし、これもなさな

ければならない。色んなことに出会ってその日その日を一生懸命に生き続けてきたことは紛れもない事実です。しかし、その事実をもう一度ゆっくり点検してみますと、あれもしてきました、これもなしてきてきたといったところでほとんどが憶えていないということはなかつたでしょう。そうすると私たちはこの年齢まで一生懸命生きてきたことに間違いはないけれども、では何を追い求めて生きて来たのでしょうか。蓮如上人の『御文』の五帖目十六通「白骨の御文」というのがございます。「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに」、浮生なる相、人間の相すがたです。つらつら観ずれば、まさに私たちは今日まで色んなことをなしてきたけれども一体何をしてきたのか。私もそうなんですけれども、私や私の家族の幸せを願いとして生き続けてきたということ。そのことは間違いありません。しかし、そのことに追いまくられて行けば行くほど、いつの間にか大切なことを私たちは忘れてきているのではないのでしょうか。それが「人界の生をうけ

て」という事ではないのでしょうか。人間という身に生まれて参りました。しかし、その人間に生まれてきたというこの意味を大切なこととして訪ねていくということが日々の慌ただしさの中でいつの間にか忘れてきた。そのことを取り戻すためにひとつの大きな仏事が執り行われています。それが報恩講であり、蓮如上人御影道中もその一つです。蓮如上人御影道中、京都から吉崎まで7日間、距離で約240キロ。御上洛の方は一日長くて8日間、270キロ。5月9日に京都に着きまして、5月10日、京都駅からサンダーバードに乗りました。金沢まで2時間30分です。その途中にですね、自分がトボトボと歩いてきた道が車中から見えます。ああここを歩いておったんだなど。ふと頭をよぎりました。なんでこんなことを私はしておるんかな。なんで8日間もかかって歩くんだろかなあと。現代の科学技術の進歩により2時間半で済むんですよ。それをなぜ歩くんです。それも344回です。全部人が歩いてるんです。人が歩い

てその人がこのことを大事にしてくださいと次の世代、次の世代に受け継ぎ伝えられてきた歴史です。まさに道が伝わつとるわけですよ。その道は次の人を生み出してきた歴史でもあります。その歴史が続いてきているということは、それはまさに一つの事実があるからですね。親鸞聖人は「信」という漢字の横に「まこと」という言葉遣いを打たれます。信という漢字、左側はんべんです。にんべんということは人です。右側は言ごんです。人の言葉です。人の言葉をまことと呼ぶということはどういうことでしょうか。人の言葉がまことになるんですよ。人の言葉がまことになるといふ事は、行動と言っている言葉が一つだという事です。自分の行動と語りかける言葉が一つ。その時にまことになるというのです。私事になりますけれどもよく家族からこう言われます。あなたは言っている事とやつとる事が全く違います。言っている事とやつとる事が全く違うという事になればまことにはならないです。親鸞聖人の生きてきた姿、そしてその

姿を通して語りかけた言葉が紛れもないまこと。そのまことの言葉に出遇った方々がいるわけですよ。その出遇った方々がこのことはまことだと。出遇いを通して伝えてきた歴史です。それがまさに人の歴史です。だからまことと出遇っているわけですよ。自分の人生に苦しんで悩んでどう生きればいいのか、もがき苦しみながら、そこに人間の事実を教えにくれた言葉、いのちの事実を生き抜いていく勇気という言葉、その言葉に触れた時、改めて自分の中に人間に生まれてきたことの尊さに気づかされ、その尊さをまた次から次へと確かめていった。その人間の歴史がまさに私たちの歩みとなつて続いているということです。

をはじめて知りました。その方はまさに浅田正作さんが言われた冒頭の「みんなこわれた なんにもならなかった」という経験をされていました。自分の思い通りにしようと思つたことがみんな壊れた。家族関係、職場での人間関係、そういうものが全部思い通りにならない。思い通りにならないというかたちで、悩み苦しんでいくところによって自分自身の存在までもうわからなくなつた。その状態の中で友人が私のことを心配して蓮如上人御影道中という一つの仏事があるから一緒に歩きましょうかと誘つてくれた。でも私は別にそんなに蓮如上人のことをよく知らないし、詳しくもない。ただ誘われたから歩いていただけです。そして歩いていく最中に常に頭の中をよぎっていたことは、どこで私は自分の命を絶とうか、このことばかりをずっと思つて歩いていました。その私が歩いているとお立ち寄りする依処で会つたこともない人が身体は大丈夫ですか？足は痛くありませんか？冷たいタオルで汗を拭いてください。冷たいお茶でのどを潤してく

ださい。お腹が空いたらどうぞここで色んなもの食べていってくださいと声をかけてくださった。色んな人と関わり、依処での人との出遇い、そして人の言葉に触れていくことができた。その方も足の裏に豆を作つて、引きずりながら一週間歩かれました。その方が一週を終えた後にこういう言葉を言われました。「歩くことが生きることでした」と。それまでは「もうみんなこわれた」わけですから嫌になつた。自分で自分の命をどこで終えようか。命を絶つ場所は道中いろんなところにありました。大津から敦賀まで道路沿いを歩きますと物流の大型トラックが横を通つていきます。そこに身体を投げ出せば、そのまま命は終えていくし、あるいは木の芽峠を越える前日にお借りする宿の裏は山です。その深夜、みんなと寝ている本堂を抜け出して一人山の中にどんどん入つていけば誰にも見つかることなく命を終えることが出来るかな。色んなことを思いながら歩いていました。でもその死にたい死にたいと思つていたのは全部私の首から上でした

と。自分の思い、意識だけ。足は決して死にたいと言つておりませんでした。朝、靴を履くときも痛い。しかし、痛い足も一歩踏み出せばまた一歩一歩と歩いていく。その歩いている私に声を掛けてくれる。会つたことも見たこともない方が私に手を合わせてくれる。その方と歩いた中でその方が言われたのは、寒風の吹く中、老人介護福祉施設から何人もおられました。膝かけをかけて寒風の吹く中、私たちが通つて行く時に手を合わせて声を掛けてくれました。なぜ人はそこまでできるのだろうかと思つた。そういうことを通していったとき、本当に自分の中で死ぬうと思つていたのは、意識だけでした。身体は少しも死にたいとは訴えていませんでした。そして言われた言葉が「歩くことが生きることでした」と。歩くことによつて普段忘れていた風の音、風が運んでくれる香り、雲の流れ、そして雨。冷たい雨でありながら、雨つてあんなに温かいんですね。五感ですよ。五感で感じる世界ですよ。普段私たち

は、なかなか五感でいのちを感じることはないんですよ。五感でいのちというものに出遇っていった時、歩くことによって自然や人を通して、歩くことが生きることでしたと、こういうお言葉を言われました。

その方と今年もご縁をいただきまして吉崎から京都まで8日間一緒に歩きました。今年は本当に笑顔でした。笑顔で歩き通されました。そして色んな方々に自分から声を掛けていった。はじめて参加された方にも声を掛ける。そうやって何か人と人とのつながり、関わりの中で人と生きていくことを感じとっておられました。京都に着いてから聞いてみました。あの時は「歩くことは生きること」と言われましたけども今はどうですかと言ったら、いや確かに今でも人間関係のギクシャクしたものは引きずっています。しかし自分が人間として生まれ、生きていく意味を改めて訪ねていくことは出来るようになりましたと。これが今年言われた言葉です。何かそこに人と出遇うこと、人によって私たちが忘れていたことを教えられていく。

それが道中です。道中というのは単に御影を運ぶというのではなく、人との出遇いなんですよ。それを端的に言ってくれたのがこの浅田正作さんの言葉ではないでしょうか。「みんなこわれた なんにもならなかった」、家族関係も仕事もみんな絶望の中だった。しかし改めて私の先にあることを喜びとして歩いていく人がいた。人に出遇うということですよ。その人が私たちに色んなことを教えてくれて、学ぶことができるわけです。人との出遇いの中に改めて生きていくこと、もっと言うならば人間に生まれてきたということを訪ねていく。そのことが蓮如上人御影道中の中心なんです。今年参加された方もそうだったと思うんですけれども、歩きながら色んなことを自問自答したのではないのでしょうか。なんで歩くんだらうか。こんなしんどい思いをして。色んなことがあります。でもそのことを一緒に歩く方々とも、布団を横にしてお話をします。まあ答えは出ないけれども次の朝、お互いが確かめた言葉を持って歩きだす。また色んな感じたことを夜話を

する。またそのことを持つて歩みだす。なにかこれが本当の真宗の姿ではないでしょうか。問いを持ち、語り、答えは出ないけれどもまたそのことを持つて色んなことに出遇いそして訪ねていく。その繰り返し繰り返し。そこに蓮如上人御影道中があると同時に報恩講もまたその歴史だと私は思います。756年、時代が変わり、社会が変わり、人間の価値観が変わったとしても私たち一人一人が今も自分の中にあるお命の事実というものに向き合い、そして人間として生きていくことを訪ねる道はずっと続いていくということですよ。その道を訪ねた人によって開かれた道をまた次の人が歩みだしていく歴史、そうやってこの報恩講という歴史が繰り返し繰り返し続けられたんだということですよ。

そのことをです。松尾芭蕉という方が「古人の跡を求めず、古人の求めし所を求めよ」と語りかけておられます。私たちはどうしても後を追いかけていく。誰かの後を追いかけていく。しかし松尾芭蕉は私の跡を追うなど言われている。跡を追うことが大事なことでなくて求めしところを求めよと。一人の人間が訪ねようとした大事なところを常に生涯をかけて求めていく。親鸞聖人の尊い仏事である報恩講、蓮如上人の御影道中、まさにそこに現代まで続いていくものは、この親鸞聖人、蓮如上人が求めようとしたものを訪ねていく歩みです。そのことが一番大事だったのではないかといただいております。

《編集後記》

◇本文は平成二九年十月十七日、浄光寺「報恩講」大速夜の法話録であります。
蓮如上人御影道中に浄光寺より田中一雄さん、松島晋さんが参加されたというご縁で、教導として歩かれていた相馬先生に御影道中を中心としたお話をお願いした次第です。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

行事のご案内

・「除夜の鐘」

日時 大晦日 午後十一時半

・「修正会」

日時 元旦 午前零時

除夜の鐘に引き続き本堂で修正会をお勤めいたします。お誘いあわせお参り下さい。